

姫路城の君主

姫路城は 16 世紀の戦国時代と長く平和な江戸時代(1603–1867)を通して、多くの異なる武家によって支配された

黒田官兵衛と豊臣秀吉

姫路城の現存する最古の記録は 1561 年に遡り、称名寺という寺の記録にある。その要塞は黒田一族に支配されていたが、それは日本の 16 世紀の戦国時代に活動していた武家である。黒田家の頭首である黒田官兵衛(1546–1604)は 16 世紀の終わりに日本のほとんどを支配下に収めた戦国武将豊臣秀吉(1537–1598)の副官として働いた。

秀吉は本州の西の端で自分の権力を固めたとき姫路を軍事行動の起点とした。彼は石垣に囲まれた 3 階建ての天守閣を建設し、周囲の村々の発展を促すため市場を設立した。秀吉がその後自分の基盤を大阪城に移したとき、彼は自分に近い仲間に姫路を監督するよう指名した。彼の異父弟である秀長(1540–1591)を、次に義理の兄の木下家定(1543–1608)を指名した。

関ヶ原の合戦と徳川将軍

1598 年の秀吉の死がよみがえる戦いの扉を開いた。1600 年の関ヶ原の合戦で、秀吉の後継者になるだろうと思われていたものたちが日本の支配を求めて戦った。勝者は徳川家康(1543–1616)で、彼は次の 250 年間国を支配する幕府の創始者となった。家康は姫路城とその周辺の播磨地方を義理の息子池田輝政(1565–1613)に与えた。輝政は直ちに城の大改修を命じ、隣接する町の周囲に堀と土の堤防を築いた。彼の一族も近くの備前と淡路地方を支配し、池田家は西日本の最も強力な軍隊となった。徳川幕府(1603-1868)の下で、地方の君主たちはしばしばある藩から別の藩へ移された。そして池田家は輝政の死から 4 年後、姫路を去った。その後城は将軍家と近いつながりのある一連の家族によって支配された。すなわち本多家、松平家、榊原家、そして酒井一族である。姫路の君主はその他のほとんどの藩よりも頻りに替わった。日本の他の地域では嫡子が藩主となるが、姫路の軍事的な重要性というのは子供の手任すことはできないことを意味していた。君主が成人した相続人なしで亡くなったとき、一家は直ちに別の場所に移された。

黒田官兵衛

豊臣秀吉(当時は羽柴秀吉)

池田輝政

本多忠政

松平直矩

榊原忠次

酒井忠恭